

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 Dementia Care Mapping (DCM) を用いた介護職員
研修の効果の検討

氏 名 安田真美

論 文 内 容 の 要 旨

【緒言】

現在、世界的に認知症高齢者の増加が問題となっており、世界保健機構は、「認知症の人の QOL(Quality of Life) に焦点を当てたケア開発の重要性」を報告している。日本の厚生労働省も 2013 年に認知症患者の QOL 向上の視点を持った介護従事者の育成の重要性、介護職員研究に関する研修内容・方法の検討の必要性を述べている。QOL の評価には患者自身の意識調査が必要であるが、認知症患者の場合、患者自身の意識調査には限界がある。このようななか、客観的な認知症患者行動観察を通じた客観的な評価指標として Dementia Care Mapping (DCM) が発表された。DCM は客観的な QOL 指標として信頼性・妥当性が検証されている。そこで、認知症患者の QOL 向上に寄与する教育的な介入が求められている中で、認知症患者の客観的な QOL 指標である DCM 評価結果を介護職員研修に取り入れることを考案した。認知症患者の客観的な QOL 指標である DCM 結果を用いた介護研修プログラムを検討することは認知症患者介護ケアの向上につながると考えた。

本研究は、認知症の方を 1 人のひととして尊重する Person-Centered Care (PCC) 理念、DCM 評価結果をもとに介護職員への教育的介入を行い、研修効果を研修前後の認知症患者の状態を DCM 評価にて明らかにし、認知症患者の QOL 向上につながる効果的な介護職員研修の示唆をえることを目的とした。

【研究対象及び方法】

介護老人福祉施設の介護職員 40 名を対象に PCC 理念、DCM 結果を基にした介護職員研修を実施した。その効果を同施設入所中の認知症患者 40 名を対象に DCM 評価を 3 回実施して検証した。1 回目をベースラインとし、研修をせずに 1 か月後に 2 回目、研修後のさらに 1 か月後に 3 回目の DCM 評価を実施した。介護職員研修プログラム内容は、認知症の基本的な理解と対応、PCC 理念と具体的な関わりを説明後、認知症患者 40 名全員の DCM 結果と介護職員の間わりについての説明とした。認知症患者 11 名については DCM 評価結果を基づく事例検討を実施した。

【結果】

認知症患者 40 名の平均年齢は 87.4±6.8 歳、疾患はアルツハイマー型認知症が 6 割以上を占めていた。認知症患者の QOL 評価である DCM 評価結果は、グループ平均 WIB 値が研修後の 3 回目に有意な上昇が認められた (2 回目と 3 回目 : $P < 0.001$ 、1 回目と 3 回目 : $P = 0.035$)。個別 WIB 値の WIB 値上昇、低下、変化なしの割合変化では、研修を実施していない 1 回目と 2 回目では変化なしが 4 割以上を占め、WIB 値上昇は 20%であったのに対し、研修後には WIB 値が増加した割合が 50%以上であった (2 回目と 3 回目では 57% 上昇、1 回目と 3 回目では 50% 上昇)。行動カテゴリー別変化では、行動カテゴリー (A) 「他者との交流」の割合が 3 回目に 1 回目と比較して有意な上昇が認められた ($P = 0.041$)。行動カテゴリーと WIB 値変化との関連では、WIB 値上昇群 (QOL 改善群) ではカテゴリー (A) 「他者との交流」が増加した割合が 50%以上を占めていた。反対に、WIB 値低下群 (QOL 低下群) ではカテゴリー (A) 「他者との交流」が減少した割合が 60%を超えていた。

【考察】

今回の研究では、介護職員研修後に認知症患者の平均 WIB 値の有意な上昇が認められた。研修前には WIB 値の有意な変化は認められず、この研究結果は本研究の介護職員研修が認知症患者の QOL 改善に寄与していることを示していると考えた。

行動カテゴリーの割合変化では、行動カテゴリー (A) 「他者との交流」が介護職員研修後に有意に上昇した。また、WIB 値上昇患者群では行動カテゴリー (A) 「他者との交流」が関連して増加していた。介護職員研修により、行動カテゴリー (A) 「他者との交流」を促すような介護職員の関わりが増えたと推測される。また、認知症患者の介護において、行動カテゴリー (A) 「他者との交流」を増やす関わり的重要性が示唆された。

本研究の研修プログラムの特徴は、職員が勤務している施設の認知症患者の DCM 結果を研修に取り入れたことである。DCM システムのフィードバックに留まらず、介護職員全員が自分たちの関わりを振り返り、検討する研修プログラムとした。本研修プログラムでは、基本的な認知症患者の理解とともに、全 40 名の認知症患者の DCM 評価結果に基づく事例検討を実施し、認知症患者と介護職員の具体的な関わりを含めて提示した。その結果、認知症患者の行動の意味を理解する姿勢を持つこと。認知症患者の希望する関わりを具体的にイメージすることができ、介護職員の行動変容につながったと考えられる。

【結論】

本研究では、職員が勤務している施設において認知症患者の客観的 QOL 指標である DCM 評価結果を用いた事例検討を含む介護職員研修を実施し、その研修効果を認知症患者の DCM 評価にて検証した。研修後に WIB 値上昇 (QOL 改善) が 50%超に認められ、介護職員研修が認知症患者の QOL 向上に寄与する可能性が示された。また WIB 値上昇と行動カテゴリー (A) 「他者との交流」には関連性が示され、介護職員研修によって他者との交流を促す関わりが増えたことが示唆された。本研究の PCC、DCM をベースとした介護職員研修は、認知症患者の QOL 向上に効果があると考えられる。